

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Stephen Castles, Hein de Haas, and Mark J. Miller

*The Age of Migration: International Population Movements  
in the Modern World, 5th Edition.*

Basingstoke: Palgrave-Macmillan, 2014, x + 410pp.

1993年にその初版が発表されて以来、S. Castles と M. Miller による “The Age of Migration” は、ほぼ5年ごとに改版が重ねられ、多様化しながらも拡大をつづける国際人口移動の動向を捉えるうえで、多岐にわたる重要なトピックを包括的に網羅したキー・レファレンスとなっている。実際、世界中の大学・大学院において国際人口移動や移民に関する標準的なテキストブックの一つとして活用され、初版と第4版については、『国際移民の時代』（関根政美・関根薫 訳、名古屋大学出版会）として邦訳も出版されている。2009年以降の改版となる第5版では、近年、経済発展と国際人口移動の関連を「人口移動転換」の概念を拡張して体系的に理論化する注目すべき研究を発表している Hein de Haas（オックスフォード大学国際移民研究所）を新たに著者に加え、内容についても初版以来の大幅な再編となった第4版に匹敵する改訂が施されている。

「まえがき」において著者らが述べているように、本書の一貫した特徴は、国際人口移動をめぐる歴史および最新の状況と変化を豊富なデータソースと事例に依拠して整理したうえで、その背景ならびに影響に関する理論的考察の基盤をわかりやすく提供している点にある。具体的には、序章につづく2章と3章において理論に関する整理を行っているが、今回の第5版では、近年の社会科学の諸分野で応用が進んでいるネットワーク理論やソーシャル・キャピタル理論に依拠した研究の紹介が拡充されている。ただし、移住・定住過程におけるネットワークの役割については、「連鎖移民」(chain migration) の概念を提示した C. Price による1960年代の研究以降、その重要性が繰り返し指摘されており、D. Massey を中心とする一連の実証研究によっても検証が蓄積されていることから、こうした古典的な研究の現代的解釈として明確に位置づけられたほうが適切であったように思われる。

理論パートで追加されたその他の注目すべき内容として、W. Zelinsky 以来の「人口移動転換理論」を、経済発展段階と人口の国外流出の関連についての「逆U字仮説」などによって補強したうえで、「国際人口移動転換理論」としての拡張可能性を提示している点が挙げられる。とくに、近年の国際人口移動研究における実証分析の精緻化と表裏一体ともいえるマイクロ要因を重視したアプローチへの偏重、さらには上述のネットワーク理論等の援用に依拠したメソレベル・アプローチへの関心が高まるなかで、こうした壮大なスケールでの体系的整理には、「(国際人口移動の) マクロ理論の再生」への意気込みが感じられ、知的好奇心が大いに刺激される。なお、「人口移動転換」という概念には、「人口転換理論」との関連を想起させられるが、ここでは死亡率および出生率の低下、そして T. Dyson が指摘するような人口転換過程の「副産物」としての国内人口移動と国際移動の関連についての言及がほとんどなく、人口研究者はやや物足りなさを感じるかもしれない。

国際人口移動の歴史と現状が整理されている4章以降では、これまで同じ章で取り扱われていた「伝統的」な主要移民受け入れ地域が分割され、「北米」については「中南米」に関する章と統合されたほか、「オセアニア」が「アジア・太平洋地域」に関する章に組み入れられている。加えて、「アフリカ・中東」に関しても新たに独立の章が設けられるなど、近年の地域内移動の拡大を反映した構成となっている。また、いわゆる「リーマン・ショック」に端を発した世界金融危機と、その後の欧州信用不安を背景とした景気後退の影響など、興味深い動向も紹介されているが、本書の概説書としての高い評価は、版を重ねるごとに充実度を増す前半の理論パートに拠るところが大きいであろう。外国人労働者や移民問題が今後ますます身近になるであろう日本においても、国際的水準での問題整理を行うための羅針盤ともいえる本書が、より多くの読者に読まれることを願う。(中川雅貴)